

「愛ちやああ——ん!」

さくらの悲鳴が、レッスルームに鳴り響く。

彼女の目の前に転がっているのは、バラバラになった水野愛の死体であった。

「そ、そんな……」

もはや物言わぬ物体と化した、かつて水野愛だったものに駆け寄ろうとして、さくらはサキに肩を強く掴まれ、静止を余儀なくされる。

「ダメだ、あれはもう……死んだ」

「サキちゃん……いやそれは知つとるけど。うちらゾンビやし」

ふるふると悲しげに首を振るサキに、さくらは当たり前のように返す。

「とにかく、現場保存だ。素人が下手に手出すとロクなことにならないけん、そーつと、そーつと……」

既にコントに入っているサキを叱るべきかどうか悩んでいると、さくらは視界の端で死体が動くのを確認した。

「う、うくん……」

気だるげな、愛の声が聞こえる。

本来なら死体が喋ったと恐れおののき驚愕する場面なのだが、ここにいる全員がゾンビであり、バラバラ死体になったことも一度や二度ではないので、さっきの悲鳴でおおよそお釣りが

出るくらいである。

「愛ちゃん、どやんしたと？」

首がもげた状態で、眠たげに瞬きを繰り返す愛に向かって、さくらはしやがみ込んで尋ねる。  
「んう、さくらあ……？ あれ、私……ていうか、なんでバラバラになってんの!？」

いちばん驚いているのがバラバラになっている愛という、なかなか奇妙な状況ではあった。  
「愛……一体誰に殺されたとや」

「いや……たぶん、体の動かし過ぎだと思うけど。前にもあったし」

そうやね、とさくらが懐かしそうに呟くのと対照的に、サキは場違いな決意に満たされているようだった。

「待つとれよ……お前を殺した犯人は、絶対このアタシが見付け出してやるけん。特攻ゾンビ探偵、二階堂サキがな！」

「だっさ……」

リリイも思わず毒を吐くレベルである。

「なんやとー！ 仏恥義理ぶつちぎまりで強そうやろが！」

「全然可愛くない！ そんなうるささそうなのより、このマジカル☆ミラクル☆キューティ魔法探偵☆星川リリイにおまかせ！ だよ！」

「はいはいまさお探偵な」

「まさおじやないもん！」

過剰装飾ではあるが魔法少女と言いつららないあたり、リリーの誠実さが窺える。

「だからな、愛」

「なによ」

リリーの小パンチ連打を背中に受けながら、サキは愛に語りかける。

「迷わず成仏しろよ……」

「いや、しないけど……」

神妙に手を合わせるサキを、愛の手がやんわりと引き剥がす。

頭と体が分離していても、体は自由に動かすことができる。ゆえに、愛の体は千切れた手足をひとつずつ丁寧に付け足していき、最後は自分の頭を掴んで、元の位置に上手く収めた。

「ふう……ううん、やっぱりなんか据わりは悪いわね……」

「愛ちゃん、大丈夫なん……？ 結構派手にバラバラになっとったけど……」

「事情を知らなければ、本当に殺人現場のようでしたものね……」

純子も不安げに愛を気遣う。が、愛は肩と腰を回しながら問題ないことを強調する。動くたびにぐちゃぐちゃ音がするのはゾンビ特有の効果音であることを加味しても、あまり大丈夫な要素が見受けられない。頑張りすぎると反動が凄いと、というのがフランシユシユ共通の見解である。

「大丈夫、平気よ！ あと一週間でテレビ収録なんだし、もつと詰めていかないとね！」

「愛ちゃん……」

愛自身もそれを自覚しながら、それでも無理をする理由が、一週間後に迫ったテレビ収録であることは明白だった。ライブ、トーク、どれを取ってもフランシユシユにとつては未知の領域であるから、詰められるところは詰めていきたい、という思いがあるのは全員わかっている。だからこそ、体をバラバラにしても頑張る愛を止めづらくなっているのだ。

「はい、レッスンを始めるわよー！ アンタたちもケンカしてないで準備する！」

「ういーっす」

「はい」

場を仕切る愛に従って、それぞれが持ち場に着き始める。その中で、ゆうぎりだけはそろそろと愛の背後に回り込み、完全に死角に入ったことを確認すると、軽くコツンと愛の頭を叩く。

「あっ」

それは、一体誰の声だっただろうか。

実際、それほど強く小突いたわけでもないのに、愛の頭部は呆気ないほど簡単に肩から取れて、ドサツと床に落ちてしまった。

「いたっ」

やっぱり痛いらしい。首が取れたことよりも、頭が床に当たった衝撃の方が強いというのも、

なかなかおかしな話ではあるが。

「愛はん。無理は禁物でありんすよ」

ゆうぎりが優しく嗜める。

こうなつてしまつてはぐうの音も出ず、愛は文字通り首を抱えたまましばらく俯いていた。愛ほどのアイドル経験者であれば、休息も重要な要素であると十分に理解しているはず。同時に、テレビに出演するということの重要性も。

それらを天秤に掛け、ぐらぐらと揺らぐ心を慮るように、仲間の声がすつと胸に入ってくる。「愛ちゃん、やっぱり少し休んだ方がよかよ。昨日の夜からずっと練習しっぱなしやったのでしよ」

「さくらさんの言う通りですよ。愛さんが倒れたら、一体誰がレッスンを引つ張つていくんですか」

もう倒れとるけどな、とサキが余計なことを言つて、さくらに睨まれる。

「……はあ。ごめん、心配かけちゃつたわね。ちょっと休ませてもらうね」

「ううん、ええよ。ゆっくり休んで」

さくらの慈愛に満ちた微笑みが胸に染みる。

愛は胸に抱いていた頭を首の位置に収めて、ひとまずレッスンスルールの隅に座ろうと歩き出す。と同時に、また首がころんと転げ落ちる。今度は床に当たる前に掴み取ることに成功した

が、このあたりで愛は疑問を感じ始めていた。

「……うん？」

ともあれ、気持ち強めに首を押し込み、捻りも加えて、多少の衝撃では取れないように首を固定する。

よし、と手を離し、一步前に進むと、肉が潰れるほど強く押し込んだ手応えはどこへやら、おむすびころりんの昔話を彷彿とさせる威勢の良さで、愛の首はころころと床に転がり落ちていった。

当然、周囲の視線も愛に集まる。愛は、頭が転がっているから自然に目が回るし、自分がどうなっているのか正直よくわかっていなかった。

「うがう」

愛の頭は、ちょうどたえの足元に転がってきており、たえはたえなので、反射的に愛の頭を噛む。

「いだだだだだ!!」

「た、たえちゃん!? だめ、それ愛ちゃんだから! あと目え噛んじゃってる、目!」

「がううー」

さくらに口をこじ開けられ、愛の頭が解放された時には、全員がその異常に気付いていた。代表して、当事者となった愛が、身を震わせながら叫ぶ。

「……首、くつつかなくなっちゃってるー!?」  
頭を抱える仕草をしても、その位置に頭がないという滑稽さを笑う者は、この部屋には存在しなかった。

「はあーいみなさんおはようございまあーああああ!? 愛、なんでおまえ朝っぱらから首取れとるんじゃい! 怖っ!」

たいそうビックリしている幸太郎に、頭を物理的に抱えている愛はご立腹である。

「なによ、ゾンビなんて見慣れてるでしょ! 首くらい取れるわよ!」

「ええ……ゾンビこわ……」

ちよつと引いている幸太郎に自分の首を投げつける愛であったが、目は回るわ地下室の床は固いわで衝動的に行動しても良いことがないと悟った。

「愛ちゃん、頭痛くないと?」

「うん、まあ、痛いことは痛いけど。いろんな意味で」

愛はさくらに拾ってきたもらった自分の首を受け取り、たんこぶが出来たらしい箇所を撫でる。自分の首を膝に置いて、後生大事に抱えている姿は不気味にも程があるが、ゾンビ慣れしている面々にはまあこんなこともあるかな程度の感想を抱くのが精々だった。むしろ、幸太郎が一瞬でも驚いているのが意外なくらいである。





さくらが目を覚ますと目の前に愛の顔があった。まだよく働かない頭で「愛ちゃんまっげ長いなあ」とか考えていると、「何してるのさくら！ 起きたのなら早く変身して！ まだ闘いは終わってないのよ！」とえらい勢いで怒られた。

はい？

変身って何のこと？

そういえば周囲がやたらと騒がしい。

身を起こして周りを見渡すと、サキが金属バットで怪獣をブン殴っていた。

「……は？」

よく見ると純子もリリイもゆうぎりもたえもいる。

しかも忍者みたいにびゅんびゅん飛びまくって、めっちゃ激しく戦っている。

みな色違いのジャージにヘルメットとお洒落から程遠いファッションで、その時点で「うん？」って感じだが、それよりなにより怪獣ってなんなん？ なんなんと言われても怪獣は怪獣としか言いようがないくらい見事なまでに怪獣で、まず身長の時点で十メートルを超えていたし、バルタン星人みたいに両手がハサミだし、色も形もとにかくひたすらキモかった。

「え、あれなんなん？ 愛ちゃんどゆこと？」

頬を引き攣らせながら振り返ると、愛もまたお洒落に程遠いヘルメットのバイザーをおろしつつキメ顔でこう言った。

「敵よ」

そーきたかー。

うん、まあ、どう考えてもお友達には見えんもんね。

でも端的に「敵だー」と言われましても、その、めっちゃ反応に困るっちゃけど。

「……どうしたのさくら？ はっ、まさかまた記憶が——」

「あー、記憶より常識の方を疑いたい気分っちゃけど、えと、今どういう状況なん？」

愛は真剣な眼差しでこちらを見ている。

冗談の類では、うん、ないっぼい。

「……どこから説明すればいいのかしら。アイツに吹っ飛ばされたことは覚えてる？」

愛が怪獣を指さすが、あんなのに吹っ飛ばされたらゾンビでも死ぬんじゃないだろうか。

前に雪山で出会った大イノシシも大概だったが、怪獣の大きさはその比じゃない。

しかし。

ということとは——本当に私の記憶が飛んじやってる可能性もあるわけで。

えーと、ゾンビになって、アイドルになって、サガロックとかアルピノライブとかそりやも

う色々とあって、それから——

「あー……ごめんなさい。ぶっちゃけなんも覚えとらんけん、最初から教えてもらえると助かるっちゃけど……」

おそろおそろ述べたさくらの言葉に、愛は一瞬だけ痛ましそうな表情を浮かべたが、すぐに気を取り直して頬を引き締めるとこれまでの経緯を語り始めた。

「悪秘密結社『ネクロマンシスZ』が送り込んでくる怪人たちによって、いま地球が大ピンチなの。それに対抗できるのは改造手術を受け、正義の力に目覚めた私たち『秘密戦隊フランシッシュ』だけ。さくら、貴女は最強の力を与えられた『フランシッシュピンク』なの！ 記憶を失って不安なのは解るけど、私たちには貴女の力が必要なのよ！」

愛ちゃんマジ顔でなんば言いよーと？ 頭に花でん咲いとーと？

しかし改造手術ときたかー。

それってつまり――

「えーと、愛ちゃん？ つまり私たちはゾンビやないっちゃね？」

「は？ ゾンビ？ そんなものいるわけないじゃない」

真顔で言われた。

はい、確定。

これ夢だ！ ぜったい夢だ！

ゾンビがリアルなのかは置いといて、とにかくこれは夢ってことにしよう。

しかし、だとするとこれからどう行動すればいいのか。

夢だと自覚してもぜんぜん目が醒めないあたり、現状どうにも打つ手がなさそうだ。

ならば夢は夢として、いつその状況を楽しむのもありなんじゃないだろうか！

小さい頃にテレビで見ていた戦隊ものを思い出す——変身して巨大な敵と戦うというシチュエーションに、それはそれでときめきを感じるのも乙女心ってやつである。

「とりあえず変身すればよかつちやね？ えーと、どうやって変身するのかな？ なんか決めポーズとかあるん？」

「なに言ってるのよ。そこに衣装があるからとつとつと着替えなさい」

あ、そこはご都合主義じゃないんだ……

夢のくせに半端にリアルな……

愛が指し示した方向に目を向けると、丁寧に折り畳まれたピンクのジャージとヘルメットが置いてある。しかし着替えろと言われても周囲は見渡す限りの荒野で、当然ながら更衣室など見当たらない。どうしたものかと思案していると、

「おい、さくら！ 危ねーぞ！」

突然投げ掛けられたサキの声。

振り向くと目の前にはさっきの怪獣がいた。

改めて見るとめっちゃデカい。そしてひたすらキモい。

怪獣は身を屈めてこちらを覗き込んでいる。夢だと解っていても巨体が生み出す迫力は凄まじく、逃げ出そうにも身体が竦んで指一本動かせない。

怪獣は右手のハサミで動けないさくらの身体を掴むと、天に突き上げるように勢いよく持ち上げた。必死に身を振って逃れようとしても、ハサミはがっちり胴体を挟んでいてどうやっても抜け出せそうにない。

ハサミに掴まれたまま天高く掲げられ、愛しい大地は遠く彼方へ。胴に食い込むハサミは鋼のように硬く、今にも身体を両断されそうで血の気が引く。助けを求めようにも恐ろしさで声すら出せず、そんな絶体絶命のピンチに対して駆けつけたメンバーたちは、

「おい、まーたさくらが捕まっちゃまったぞ」

「またでありんすか」

「まったく……ちつとも学習しませんね」

「毎度のことだし、もう放つといていいんじゃないかなっ」

「ふわあーふ」

と、すげなく答えた。

たえは欠伸しただけだった。

あれあれ？　なんかみんなの反応冷たくない？

私が捕まるのはどうやらいつものことっぽいけど、夢の中でくらくらい目みせてくれてもよなくない？

「なに言ってるのよみんな！　早くさくらを助けるわよ！」

愛の叱咤にメンバーたちは「ええー？」とやる気なさげに反応する。なんかもう悲しいやら申し訳ないやら穴でも掘って埋まりたい気分だが、愛だけは、

「みんな忘れたの!? さくらがいたから私たちここまでやってこれたんじゃない!」

そう言ってくれたのでほろりと涙が零れそうになった。

愛の言葉に感銘を受けたように、みんなの体も打ち震える。

「そうだな……さくらがいなかったら、アタシらみんなバラバラのままやったしな」

「ええ……私が悩んでいる時、ずっと寄り添ってくれたのもさくらさんでした」

「リレイのお話も聞いてくれたんだよ！ 今度はリレイたちがさくらちゃんを助ける番!」

「さくらはんのおらん勝利より、さくらはんと共に敗北したい……でありんしたな」

「フンガー!」

アルピノライブ前日の、みんなが掛けてくれた言葉を思い出す。

あの時、塩対応した自分をぐーで一万発殴りたい——さくらがそう思いつつ感謝の涙を零す中、怪獣さんも空気を読んだのか無言で待ってくれているし、どこからともなく勝利を予感させる徒花を唸らせそうなテーマソングが聞こえてきた。

「いくわよ、みんな!」

「[[[[[おう!!]]]]」

愛の号令に全員が唱和し、勢いよく怪獣に向かって走り出す。

怪獣も待つてましたとばかりに迎え撃つ構えを取り、さくらは囚われのお姫さま気分での勝利を願った。怪獣の目から放たれる謎ビームを紙一重で躲し、サキが金属バットを叩き付ける！ 怒り狂った怪獣がハサミを振り下ろすのを、受け止めるどころか粉碎する勢いで愛が拳を炸裂させる！ たえは回し蹴りで怪獣を蹴り飛ばし、純子は怪獣の頭にある謎の突起物を掴んでぐるぐる回り、リリイとゆうぎりは並んでお茶を飲みつつ「がんばれー」とエールを送る！ フランシユシユの怒涛の連続攻撃にさしもの怪獣もたじたじた！

一方その頃、さくらは愛の拳の衝撃に下腹を貫かれ、「げふおあ」とアイドルとしても女子としてもマズいものを噴出していた。

——愛ちゃん。人質おる方の手を攻撃したらアカンて。

その想いを最期に、さくらの意識は暗黒へと沈んでいった。

「……という夢をみたんよ」

さくらの言葉にサキはのたうち回りながら爆笑し、愛は不本意そうに眉をしかめている。

純子とリリイはどう返したものと複雑そうな表情で顔を見合わせ、ゆうぎりはいつものようににこにこ笑って、たえはロメロと玉ねぎの取り合いをしていた。

ここは監獄——にしか見えない恒例のミーティングルーム。

以前は幸太郎の持ち込んでくる無理難題に備えて誰もが無言で構えていたが、最近はこのように朝の雑談を行う程度の余裕はできた。人間、いやゾンビも、何でも慣れれば慣れるものがある。

「しっかし戦隊ものかー。そいやおまえら何ライダー派？ アタシはBLACK」

「サキちゃん、相変わらず戦争になりかねないネタをいきなりブツ込んでくるね……うーん、私は龍騎かなー」

「私はアギトね。要潤が格好よかったなあ」

「わ、私は初代しか認めません！ あのドロドロした不気味な雰囲気はよかったのに、視聴率が悪いからって変身ポーズだのなんだのと商業主義に走りまくって……あんなの石ノ森先生に失礼じゃないですか！ そもそも生みの親であるショッカーと人間との間で揺れ動く改造人間





その部屋の扉を開こうと思った理由は単純なもので、最初はただの退屈しのぎだった。

どうやら私は知らない間に死んでいて、頼んでもいないのにこの世に呼び戻されて、やれゾンビだサガだアイドルだと無理無茶無謀な難題を押しつけられて。

果たしてそれが自分の遺志だったのか、それとも誰かの願いだったのかは解らない。解らないけれど、解らないままでもいいのかもしれないと、最近は思うようになってきた。

——そもそもゾンビって何？ 火葬されて粉々になった骨がゾンビになるの？

今の自分という存在を少しでも気にしてしまえば、そんな疑問がいくらかでも湧いて出てくるのだから、気にするだけで疲れてしまう。というか、実際に疲れた。

目覚めたばかりの頃は状況を受け入れられなくて、それ以前に自分が死んだという事実だつて認められなくて。

『ここを出て東京に行く』

今になって思い返してみると、随分と馬鹿な事を言ったと思う。けれど当時の私は本気でそう思っていたのだ。帰るべき場所があると。やるべき事があると。

——そんなものはとうの昔になくなっていったのに。

その時に自分がヒトならざるものであるという事を嫌と言うほど見せつけられて、結局私はゾンビでサガでアイドルをやっている。

状況に流されているようで気に入らないけれど。アイツの手のひらで踊らされているようで

嫌だけど。

それでも、どんな形であれもう一度アイドルが出来るなら。もう一度あのステージに立てるなら。もう一度あの輝きを見られるなら。

私はどんな事だつてやってやる。

——失敗も後悔も、どれだけしたつて構わない。それら全てを踏み越えていけば、やがて誰にも負けない自分になれると信じている。自分が目指す頂、道なんてものが存在しないそこへ辿り着くためには、そのくらいの覚悟が必要なのだから。

とはいえ。

さすがにゾンビというのは想定外だった。

ゾンビのアイドルなんて勿論聞いた事はなかったし、そんなものがやっていけるとは微塵も思わなかった。

同じようにゾンビとして甦ったという娘たちは素人ばかりだったのだから、尚の事。

でも彼女たちはどうやら本気のように、私もそこに可能性を感じる事が出来た。

ゾンビでも、アイドルとして。フランシシュとして。

生前の——アイアンフリルのメンバーには申し訳ないと思う。十年も前に死んだのだから、もう当時のメンバーは誰も残っていないかもしれない。アイアンフリルというグループが今も残っているのかさえ解らない。それでも割り切つてしまえるほど自分の中で思い出にはなつて

いないのだ。

戻れないのなら、せめてあの時以上の輝きを見せる事で償いたい。  
たとえ水野愛として見られなくても、だ。

「失礼します、と」

長々とした前置きは、自己紹介でも思ってくればいい。

そんな事を考えられるくらいには、今の状況にも慣れて余裕が出てきたという事なのだろう。  
気持ちに余裕が持てるようになれば、自然と時間にも余裕が出てくる。

ただ、どれだけ余裕が出来たところで屋敷の外には出られず、かといって屋敷の中に娯楽と呼べるようなものは無い。自分たちの記事が載ったりすると、その雑誌だったりがいつの間にか置かれていたりするけれど、まあ言ってしまうえばそのくらい。

屋敷と言える程度の広さはあれど、無限でなければやがて目新しさは失われていく。

何かないかと探索を始めてから、何日もしない内に早くも未見の場所は尽きてしまい、残るはアイツの——プロデューサーを自称する巽幸太郎とかいう男の部屋だけになった。

別に隠れて忍び込むような真似をしなくても、正面から堂々と入ればいいのかもしれない。  
でもアイツと一対一で向き合うのは絶対にイヤだ。無駄にストレスを溜め込む結果になるの  
が目に見える。

そんな訳で残る探索ポイントがこの部屋だけになった時から、アイツの行動パターンを探る

事数日。

辿り着いた答えは入浴時間。大体三〇分、平均すると三五分は確実に部屋を空けている。

「なんだ、結構綺麗にしてるじゃない。意外と几帳面？」

破天荒というかつかみ所がないというか、あんな性格をしているのだから部屋もそんな感じかと思つたのに、ピアノに埃は見え、ギターもきちんと並べてスタンドに立てられている。

「……いや、そうでもないか」

パッと見は整頓されているように見えたのに、もう少し視線を下げてみると、ピアノの周りには床に本が積み上げられていて、部屋の真ん中、ソファに挟まれた低いテーブルの上にも五線譜や本が散らばっている。

概ね想像通りで、面白くない、というのが正直なところだった。

「本棚も読めそうなのはなさそうね」

音楽理論やDTMに関する技術書、それ以外だと営業がどうかという物ばかり。ただ、そのどれもが随分と読み込まれているようで、綺麗な状態の本は一冊も見当たらなかった。

「あれで案外真面目にやつてる……？」

それなら自分たちに対してでももう少し真面目に接してほしいと思つたものの、その姿を想像すると、それはそれで何か違うような気がしてくるのだからタチが悪い。

「となると、やっぱりこれでしょ」

部屋の中をぐるりと見回して、最後に視線を止めた机の上。

パソコンの本体から伸びるケーブル、その先に繋がれたモニターは、今も画面に様々なウィンドウが表示されている。

電源が切られていたら、パスワードが設定されていたら、という不安はどうかやら杞憂に終わっていたらしい。

机に備えられた椅子に腰を下ろして、モニターを見る。

エクセル。テキストファイル。ブラウザにはどこかの企業のホームページ。その他何かよく解らないものが色々。

どうやら真面目に仕事をしているようだったけれど、それらは全部スルーする。興味が無い訳ではないものの、自分が見ても仕方ないだろう。

注目すべきはただ一点。インターネットに繋がっているかという、ただそれだけ。

たとえ屋敷に何もなくても、この部屋に何もなくても、ネットに繋がっていればあらゆる情報を得る事が出来るのだから。

退屈しのぎと、いくらかの好奇心。元より部屋に何かがあるとは思っていないくて、むしろこちらを目当てに忍び込んだといっても過言ではない。

「とりあえずは……今が本当に二〇一八年なのか、つてところからかな」

ゾンビとして目覚めてからというもの、何度か屋敷の外を見る機会はあったものの、それだ